

(2) 伊平屋島杣山竿入帳に記された情報

①王府時代の杣山竿入帳（ソマヤマ サオイリチョウ）

琉球王府は1737年（元文2）から1750年（寛延3）にかけて、独自の大規模な測量を実施し、伊平屋には1744（乾隆9）に入り、杣山竿入帳を作成したといわれる。

伊平屋島杣山竿入帳は、王府時代の杣山の測量情報を持つ県内で唯一の資料であり、この史料を参考に杣山範囲を図化した。竿入帳に記された杣山は5箇所あり、一番杣山は阿波岳、二番杣山は賀陽山、三番杣山は腰岳、四番杣山は前岳、五番杣山は後岳とタンナ岳、クバ山である。

②五番杣山に多い測量情報

五番杣山は最も面積が広く、測量する際に特定の地点から遠方のランドマークを見通している場所が5箇所ある。西海岸に「やへい瀬真辻」と「やへい瀬」としてヤヘーグスクを遠望する2箇所、クバ山を望む「美崎山嶽真辻」と美崎御嶽廻りから「伊是名城真辻」の2箇所、ガジナ原と東原の境界近くから「前嶽真辻」を遠望する。

③杣山を引き継ぐ村有林と5箇所の県指定自然環境保全地域

これらの5箇所の杣山は村有の山林と範囲がほぼ重なる。この村有林において、良好な植物などが分布する5箇所、田名クバ山、後岳、腰岳、賀陽山、阿波岳が県の自然環境保全地域として指定されている。

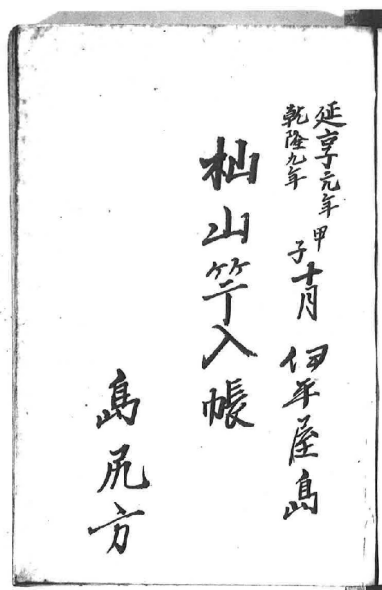
④集落と歴史的道筋

琉球国惣絵図には5箇所の集落と各集落を結ぶ道が描かれている。北から念頭平松の南側に田名村、現在の前泊の北側に田名村、また、我喜屋村、島尻村、野甫村の5箇所の集落位置と4村名が記載されている。

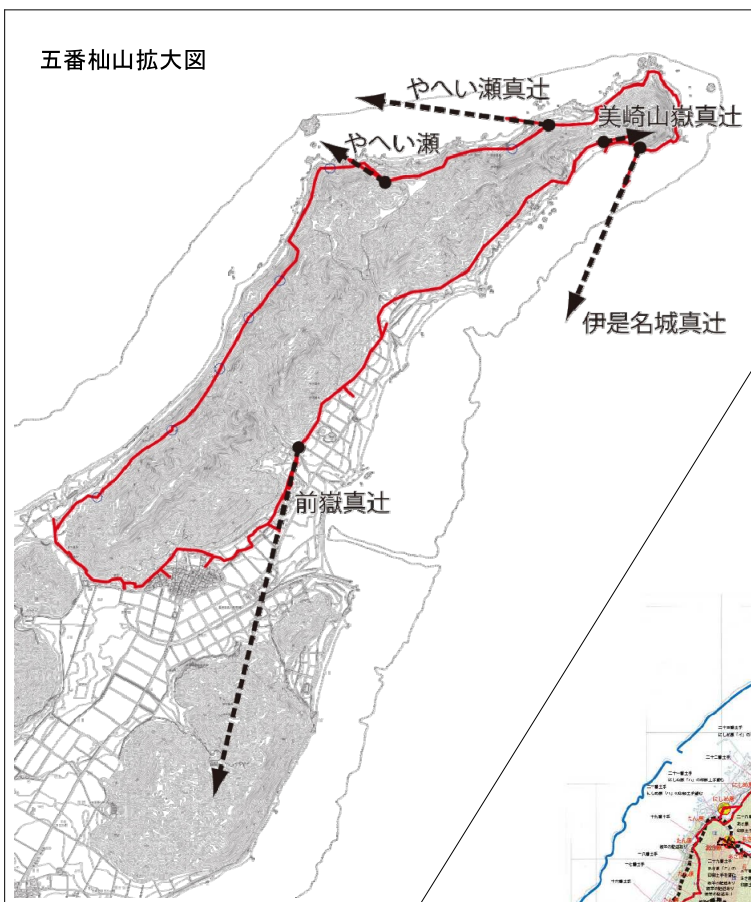
琉球国惣絵図に記された杣山



杣山竿入帳の表紙



五番杣山拡大図



五番杣山

四番杣山

三番杣山

二番杣山

一番杣山

- 自然環境保全地域
- 杣山
- 印部石

凡 例	
23	林 道
24	林 道 界
25	林 道 界
26	林 道 界
27	林 道 界
28	林 道 界
29	林 道 界
30	林 道 界
31	林 道 界
32	林 道 界
33	林 道 界
34	林 道 界
35	林 道 界
36	林 道 界
37	林 道 界
38	林 道 界
39	林 道 界
40	林 道 界
41	林 道 界
42	林 道 界
43	林 道 界
44	林 道 界
45	林 道 界
46	林 道 界
47	林 道 界
48	林 道 界
49	林 道 界
50	林 道 界
51	林 道 界
52	林 道 界
53	林 道 界
54	林 道 界
55	林 道 界
56	林 道 界
57	林 道 界
58	林 道 界
59	林 道 界
60	林 道 界
61	林 道 界
62	林 道 界
63	林 道 界
64	林 道 界
65	林 道 界
66	林 道 界
67	林 道 界
68	林 道 界
69	林 道 界
70	林 道 界
71	林 道 界
72	林 道 界
73	林 道 界
74	林 道 界
75	林 道 界
76	林 道 界
77	林 道 界
78	林 道 界
79	林 道 界
80	林 道 界
81	林 道 界
82	林 道 界
83	林 道 界
84	林 道 界
85	林 道 界
86	林 道 界
87	林 道 界
88	林 道 界
89	林 道 界
90	林 道 界
91	林 道 界
92	林 道 界
93	林 道 界
94	林 道 界
95	林 道 界
96	林 道 界
97	林 道 界
98	林 道 界
99	林 道 界
100	林 道 界

村有林計画図・杣山竿入帳印部石等情報重ね図

(3) 遠目番と火立て屋

①遠目番

琉球王府に海上交通の監視・通報（烽火）を目的として、琉球各所に遠見番や火立て屋を設置した。琉球国惣絵図には、我喜屋の西海岸に遠目番と記載されており、現地は西海岸から東海岸に向けて見通しの良い場所である。

②火立て屋

賀陽山の島尻側には伝承で火立て屋があったと言われ、山裾から少し登った場所で石積みと洞穴がある。この火立て屋は東海岸側にあり、本島の今帰仁城跡や運天方面に見通しが開ける場所である。

伝説では、屋蔵大主の護衛が住みグスクとの見張りの連絡所として使った場所、のちに伊平屋から航海に出る人を見送るための松明を立てた（ティラチ）場所とも言われる。

③野甫島のチジ石

野甫島は石灰岩の低島だが島の南側に一部チャートが見られる場所があり、周囲より際立った地形を呈している。この岩は狼煙を上げた場所との伝説がある。



遠目番（アーガ森）



火立て屋



チジ石

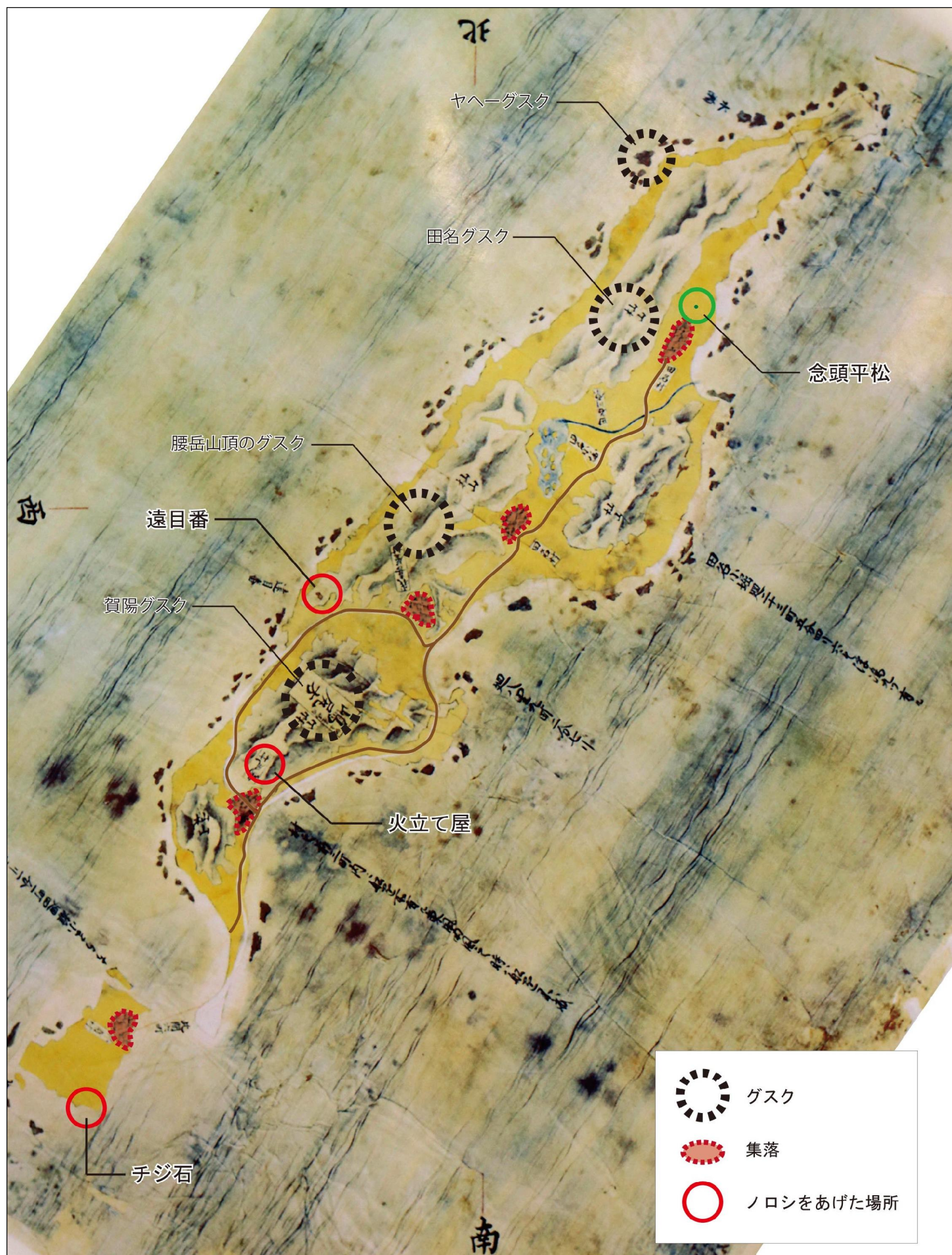
(4) 念頭平松

念頭平松の北側には東原貝塚があり、この一帯は貝塚時代から近世にかけて人々が利用してきた痕跡を残している。琉球国惣絵図では、石蔵川の南の東ガジナ原に田名と記載された集落が書かれている。その北側に、樹齢270年に達する念頭平松が位置する。植栽された時期をさかのぼると1745年頃に想定され、伊平屋の杣山測量で乾隆検地が行われた頃でもある。



伊平屋島の念頭平松

琉球国惣絵図に記された遠目番とグスク想定位置



4) 近現代 (1879 年以降)

(1) 廃藩置県から伊平屋村の成立まで

伊平屋島・野甫島の伊平屋地方二島と伊是名島・具志川島・屋那覇島・屋の下島・降神島の伊是名地方五島を合せて、「伊平屋の七離れ」と呼ばれていた。島の呼び方はいちへな（伊是名）えひや（伊平屋）伊瀬名（伊是名）恵平也（伊平屋）などと呼ばれ、中国からの冊封使は伊平屋島を葉壁山と称し金箔の書掛軸を与えられた。

明治 12 年の廃藩置県により琉球藩が廃止され、沖縄県となった。その後、明治 42 年の島嶼町村制施行により田名村・我喜屋村・島尻村・野甫村・伊是名村・仲田村・諸見村・勢理客村が合併し島尻郡伊平屋村が成立し村役場は伊是名島に置かれた。

その後、昭和 14 年の分村許可司令により、伊平屋村の一部（伊是名・仲田・諸見・勢理客）が分立し、伊是名村が成立して単独村政が開始された。

(2) 大正時代の伊平屋島・野甫島の集落と道筋

伊平屋島・野甫島の地形図から、琉球国惣絵図（以下、惣絵図）に描かれた王府時代の集落と道筋が変化してきた状況がわかる。右図は貝塚時代から近世の情報を大正時代の地形図に重ねたものである。

① 田名グスクをクサテ森とした集落

惣絵図ではガジナ原に田名村があったが大正時代には集落は消え、東海岸の北にかけて宅地が散在する。その一方、田名グスクの南に明確にまとまった集落があり他集落と比較して規模が大きい。集落の南側には 田名グムイと田名川、水田（水色）が開け、ユナ道が集落中央に向けて道筋を変え、アサ道が西側の山裾に通るなど、現在の田名集落一帯の状況である。

② 久里原の集落

惣絵図で田名村と描かれた 2 箇所のうち田名グムイの南側集落は、大正時代の図ではユナ道とアサ道に挟まれた範囲の久里原集落になっている。集落北側に 3 本の道筋が田名に向かって通り、水田が広がる。海岸に面した貝塚時代の遺跡地区には、宅地が散在している。

③ 我喜屋

我喜屋は惣絵図の集落位置から南の内村に移動しており、さらに学校や宅地が南側に展開してきた。腰岳の南側にはまとまった水田が広がり、学校から西に伸びる賀陽山の山裾に道筋が通っている。

④ 前泊

前泊は貝塚時代の遺跡地区と惣絵図の集落は、ほぼ同位置にあり、現集落位置に重なる。

⑤ 野甫

貝塚時代の遺跡地区に惣絵図の集落、大正時代の集落が重なって存在する。大正時代の集落は現在よりも北に広がりを持っている。

(3) 戦中戦後の伊平屋島・野甫島

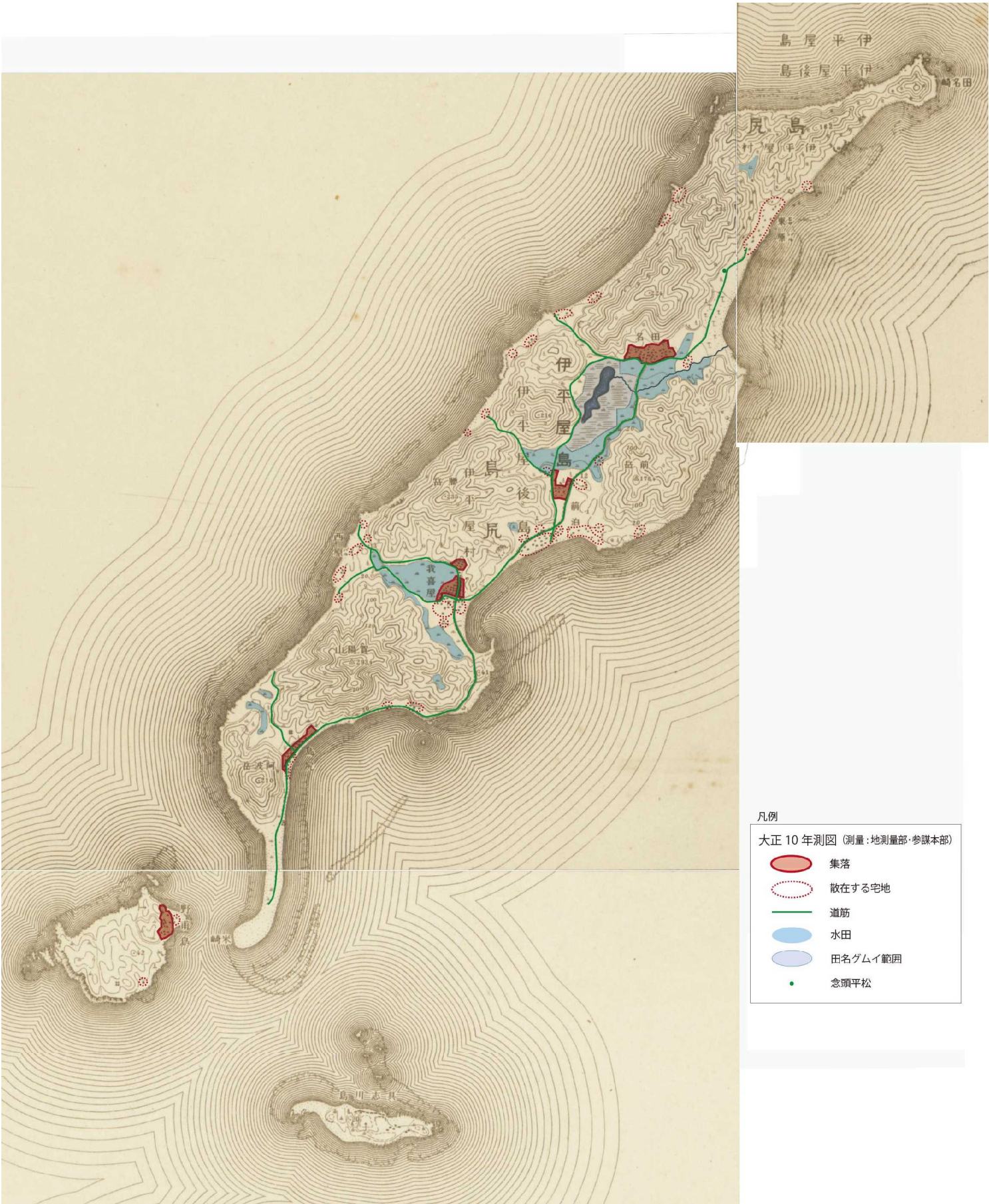
① 飛行場跡や伊平屋の塔など

昭和 16 年 12 月 8 日大東亜戦争が始まり、昭和 19 年には空襲により田名集落で数棟焼失した。また、同年 6 月 3 日に米軍機動部隊が上陸し、空中射撃や艦砲射撃により 40 余名の村民が犠牲者となった。同年 11 月 22 日米軍が伊平屋から引き揚げたことで村民収容解除され、田名より各集落へ復帰し戦後の混乱期の生活が始まった。

伊平屋島や野甫島では戦跡の調査が実施されていないが、我喜屋の飛行場跡や特攻隊の飛行機落下、慰霊の塔である伊平屋の塔などが戦争に関連する場所である。

② 歴史民俗資料館に収蔵されている戦中戦後の米軍写真

歴史民俗資料館には、米軍が撮影した多くの写真資料が展示されている。



6. 集落移動した田名と我喜屋

1) 田名

①琉球国惣絵図の2箇所の田名村

琉球国惣絵図では田名村は2箇所ある。南の田名村は現在の前泊集落の北側、腰岳から東に伸びた尾根の下、イユヒンナと久里村の地名が残る場所である。この田名村と記された場所は大正10年（1921年）測図にも集落が記載されている。

北側の田名村は田名グスクの東側の山裾に細長く広がり、現在の念頭平松の南でアカシヌハマの背後、田名川を渡った北側に位置している。

②記載の無い現在の田名集落

この図面には現在の田名集落の記載が無い。この辺りには田名川原と記載されている。

③ユナ道

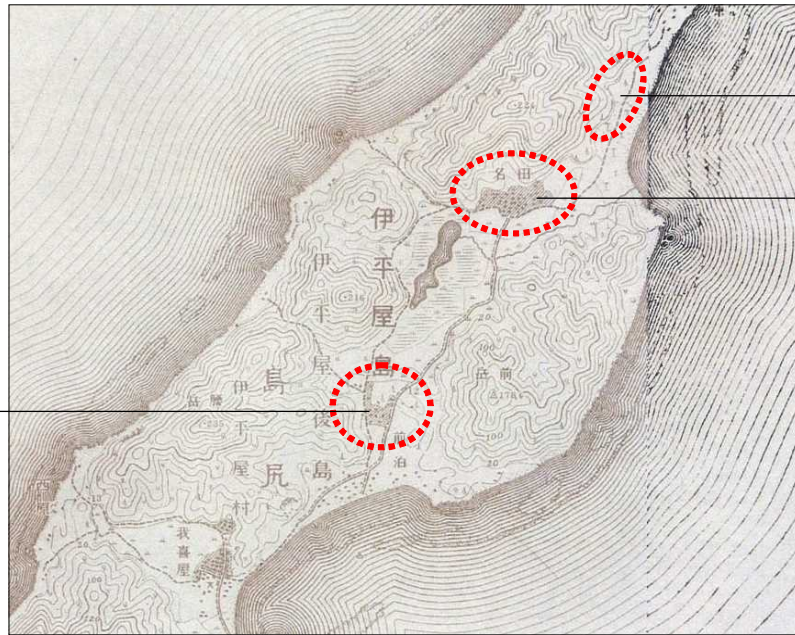
我喜屋からの道は北上し、南の田名村の東側を通り田名小堀、田名川原を過ぎ北の田名村に達して道は途絶える。この道はユナ道とほぼ一致する道筋である。

④現在の田名集落が描かれる大正時代の図面

大正10年1921年測図では現田名集落がはっきり記載されている。その一方、琉球国惣絵図の北の田名村は姿を消し、さらに北側、石下墓の南側海岸沿いに家屋の点在が見られる。



大正 10 年（1921 年）測図



惣絵図に記された
田名村は消えている

現在の集落と同位置

惣絵図では田名村と
記された集落

現在は集落はない

2) 我喜屋

①伝説遺跡などから知る古集落

伝承によれば、賀陽山と腰岳にはさまれた西海岸に近いウフンダ森やサーフと呼ばれる地が、古くは人々が住む集落があった場所で、ウフンダ井泉はその名残であると言われている。その後、人々は上里に移り住み、来島した屋蔵大主が上里の近くの蔵屋敷跡に居住したとされる。

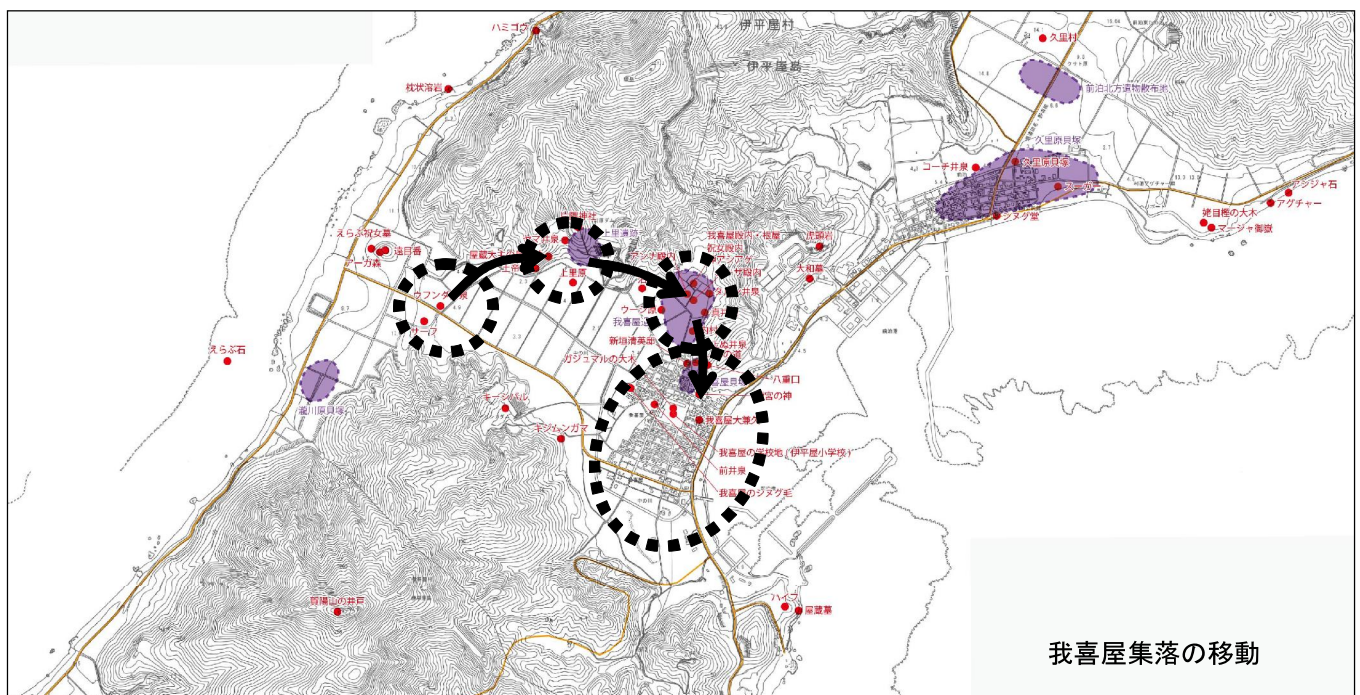
上里の南側にはトマイ（港）やナートダ（港田）の地名がのこり、船の出入りがあったことが原名（ハル名）から推測される。

②琉球国惣絵図にみる神アジアゲ周辺の我喜屋集落

我喜屋村は腰岳の南側、我喜屋遺跡の場所で現在の神アジアゲやタルシ井泉、真井泉が分布する場所に位置している。集落の南側に道が通り北側は腰岳の低い嶺が囲う。

③大正時代に南に拡大する内村

大正 10 年（1921 年）測図では神アジアゲを中心とした我喜屋村が記載されているが、集落は南側の内村に拡大している。



我喜屋集落の移動

7. 集落が受け継ぐ祭りなどの年中行事

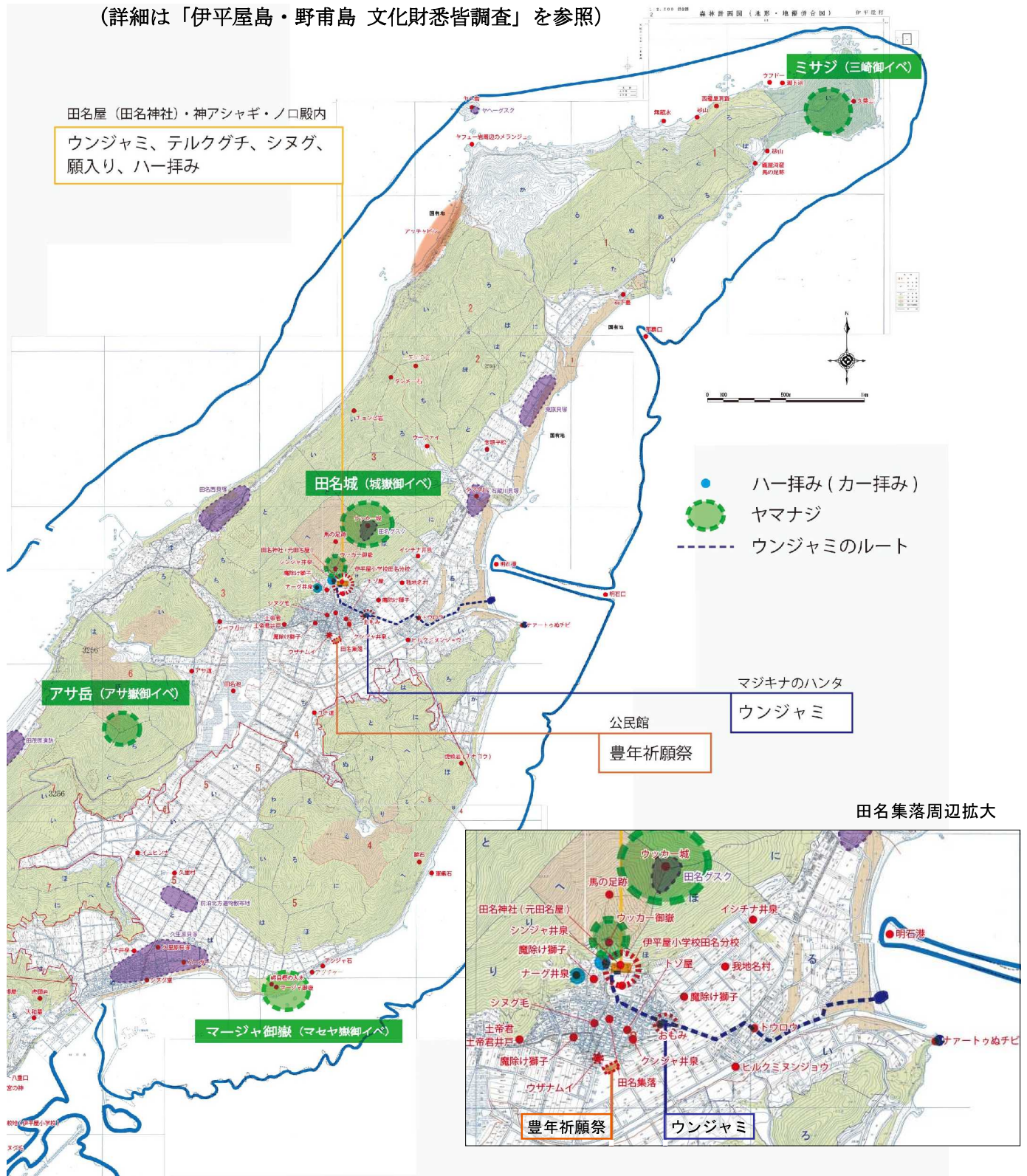
伊平屋島、野甫島は伝統的な多くの年中行事を継承してきた「まつりの島」である。
シヌグ、ウンジャミ、豊年祭をはじめ、各集落の年中行事は盛んである。

1) 田名の年中行事

(1) 年中行事と場所

田名で調査（平成 26 年度）を実施した年中行事のウンジャミとテルクグチ、シヌグ、願入り・豊年祈願祭、山ナジ、ハー拝みが実施された場所を以下に示す。

（詳細は「伊平屋島・野甫島 文化財悉皆調査」を参照）



(2) ウンジャミとテルクグチ



(3) マセヤ嶽御イベ（マージャ御嶽）の山ナジ



(4) 城嶽御イベ（田名城）と旧お宮の山ナジ



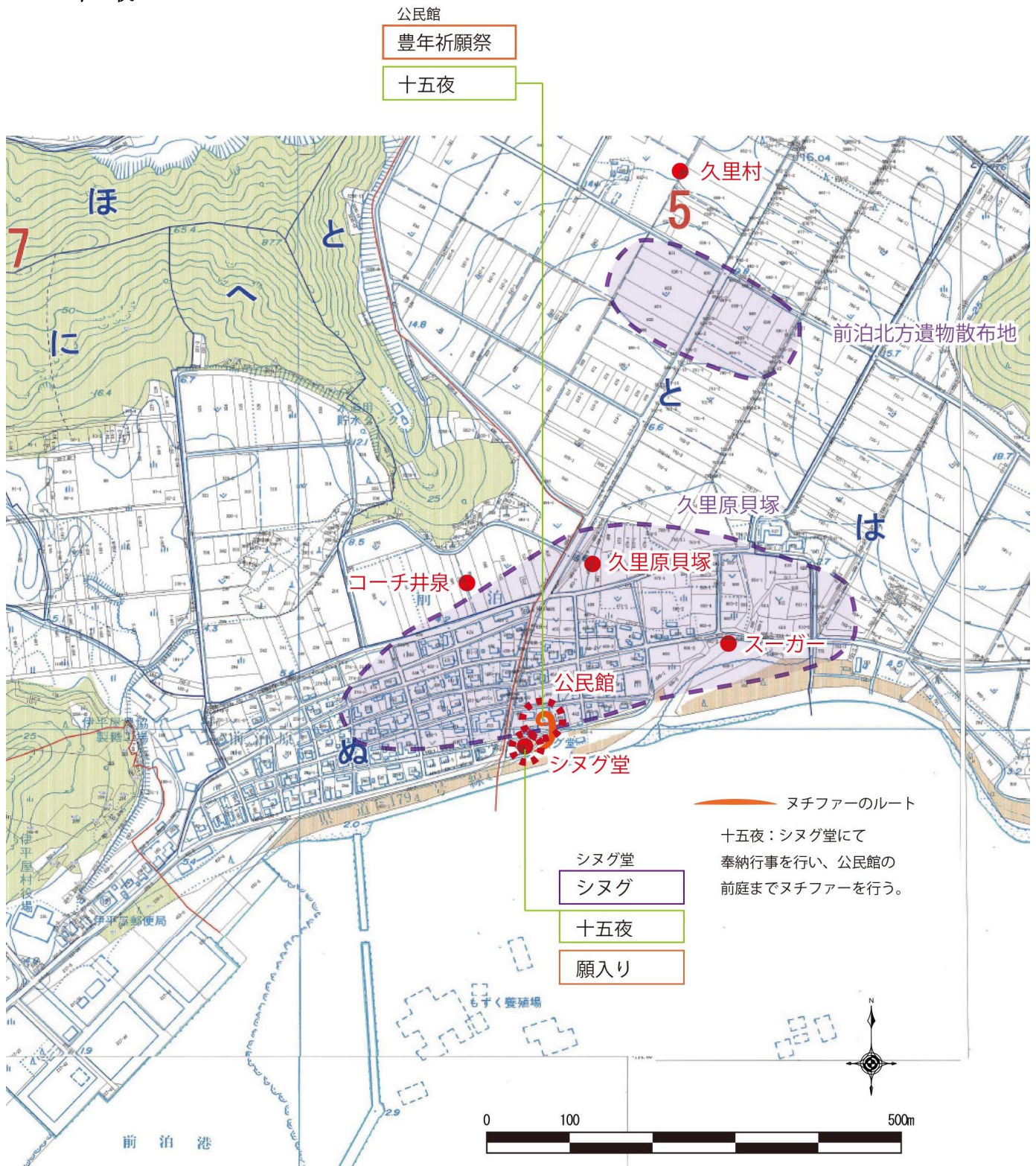
2) 前泊の年中行事

(1) 年中行事と場所

前泊で調査（平成 26 年度）を実施した年中行事と、これらの行事が実施された場所を以下に示す。

（詳細は「伊平屋島・野甫島 文化財悉皆調査」を参照）

- ・シヌグ
- ・願入り・豊年祈願祭
- ・十五夜



(2) シヌグ

ヒヌカンを拝む



全員に酒が注がれてゆく



地謡によるカーリー3曲



家族ごとに新生児と家族の紹介



家族ごとに新生児と家族の紹介



カチャーシー



地謡による演奏



(3) 願入り・豊年祈願祭

神主がヒヌカンに拝む



酒を飲み、清める



公民館へ移動



イリファー



イニシリ節



豊年祈願祭



前泊エイサー



カチャーシー



(4) 十五夜

十五夜のお供え物



かぎやで風



ヌチファー(出羽)



十五夜



(1) 年中行事と場所

(詳細は「伊平屋島・野甫島 文化財悉皆調査」を参照)





(3) テルクグチ

テルクグチの準備

殿内のヒヌカンに焼香する

地謡によるテルクグチ

お供え物を配膳



(4) 願入り・豊年祭

願入り行事前

棒術

イリファー



イリファー

ヒヌカンに奉納

奉納を見守る

かぎやで風



上り口説

地謡による生演奏

カチャーシー

ンデファー（出羽）



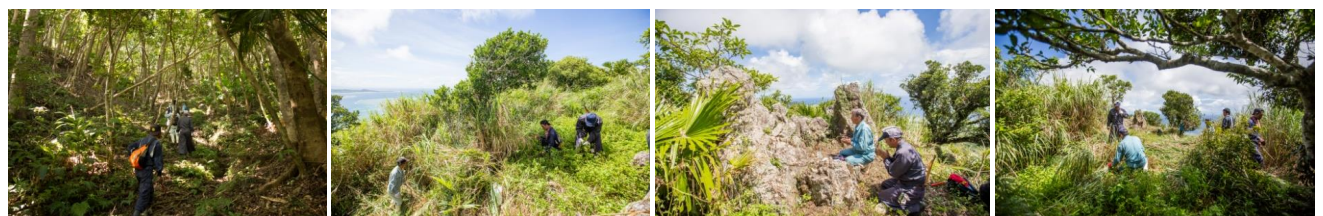
(5) 山ナジ：賀陽山

イリシナダム駐車場より出発

山頂、拝所の石の周りを清掃

石に向かい拝む

薙ぎ払い後に線香を置き酒で清める



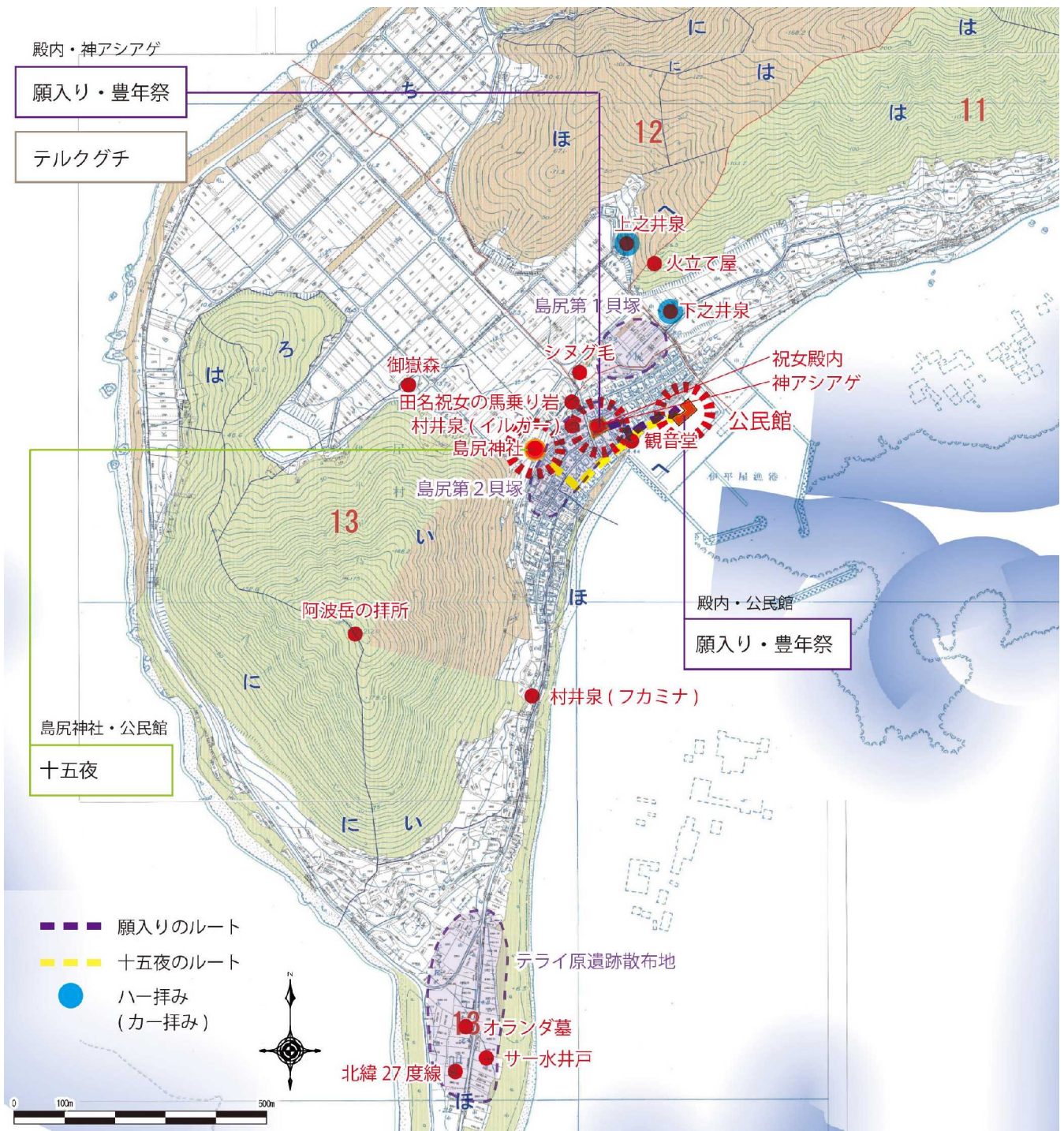
4) 島尻の年中行事

(1) 年中行事と場所

島尻で調査（平成 26 年度）を実施した年中行事と、これらの行事が実施された場所を以下に示す。

（詳細は「伊平屋島・野甫島 文化財悉皆調査」を参照）

- ・テルクグチ
- ・願入り・豊年祈願祭
- ・十五夜
- ・ハー拌み



(2) 願入り・豊年祭

願入り前の準備



前棒

棒術予行演習



中棒

殿内前



後棒

前棒



後棒



イリファー



イリファーを見る人達



かぎやで風



上り口説



カチャーシー



ンデファー



豊年祈願祭



(3) 十五夜

旗頭による棒術



拝む

イリファー



地謡による演奏



カチャーシー



(4) ハー拝み（カー拝み）：シチャヌカー（下之井泉）

拝み前



シチャヌカーでの拝み



拝み後のサンゴ散布



拝み後のシチャヌカー



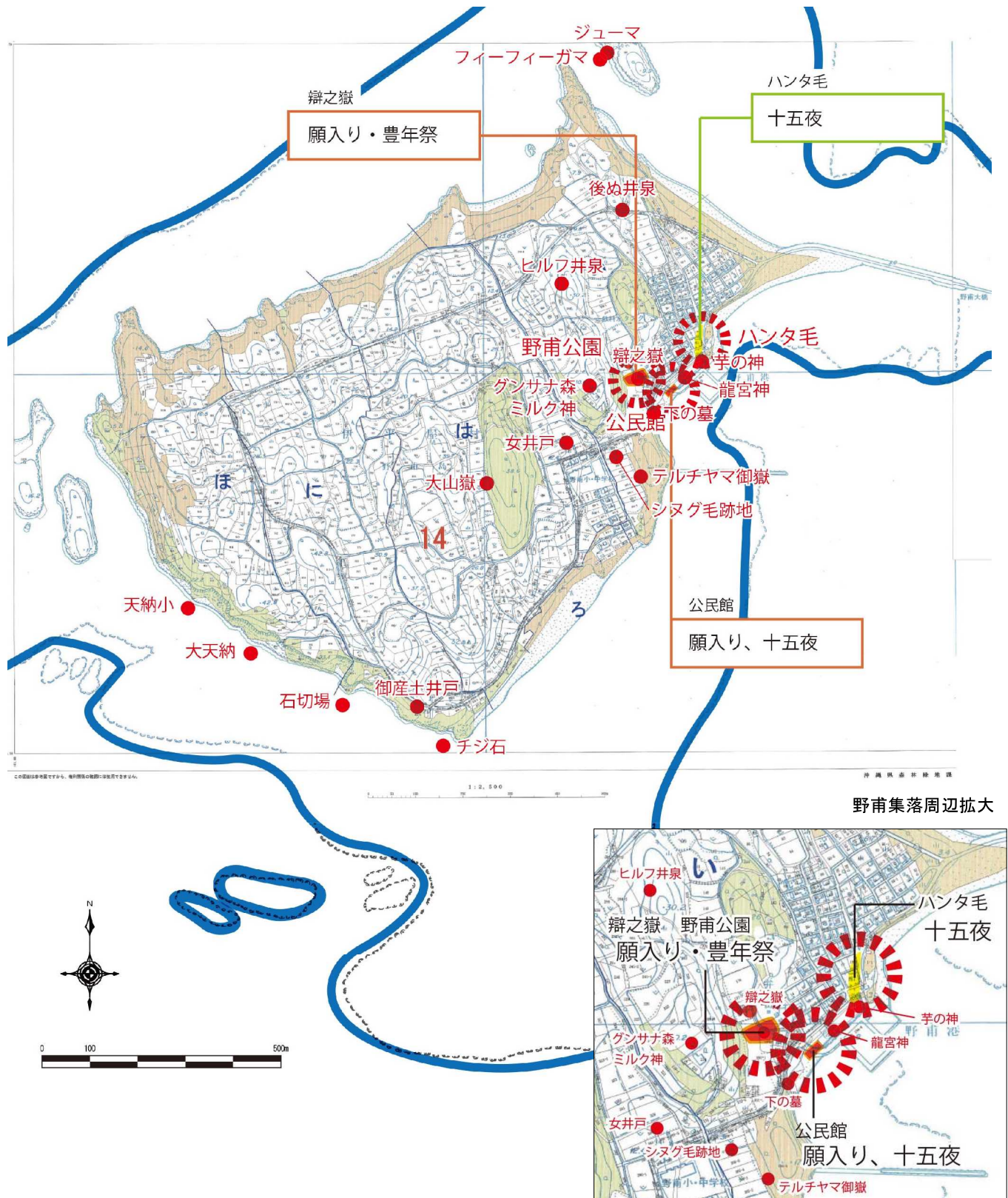
5) 野甫の年中行事

(1) 年中行事と場所

野甫で調査（平成 26 年度）を実施した年中行事と、これらの行事が実施された場所を以下に示す。

（詳細は「伊平屋島・野甫島 文化財悉皆調査」を参照）

- ・ 願入り・豊年祈願祭
- ・ 十五夜



(2) 願入り・豊年祈願祭

ヒヌカンにお供え



ウサンデーしたものを頂く



ヒヌカンを拝む



地謡の演奏による嘉例3曲



カチャーシー



棒術



棒術



イリファー



豊年祈願祭前



上り口説



カチャーシー



棒術



ンデファー



(3) 十五夜

十五夜前のハンタ毛



1回目の棒術



2回目の棒術



“ハンタ毛”を踊る子ども達



8. 古墓

伊平屋島、野甫島には自然の岩や洞穴を利用した共同墓地や野甫の石を使った亀甲墓など、各集落に古墓が多い。

田名 石下墓（イシチャバカ）



東海岸 シンザ周辺 田名グスク東麓 旧ガジナ



我喜屋 えらぶ祝女墓



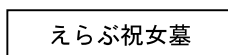
我喜屋 八重口



屋蔵墓

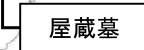


えらぶ祝女墓



八重口

屋蔵墓



前泊 亀甲墓

島尻 亀甲墓

凡例

- 伝説と関わる古墓
- 墓分布
- 亀甲墓の多い場所

野甫 下の墓（シチャヌシンジュ）

大天納

天納小

下の墓

大天納（ウフアマンナー） 天納小（アマンナーグラー）

野甫 亀甲墓

50

第3章 関連文化財群と歴史文化保存活用区域の考え方

1. 伊平屋村における関連文化財群の考え方

1) 視点

伊平屋島・野甫島の文化財悉皆調査を実施して見えてきた歴史文化の特徴から、以下の3つの視点を中心に据え、関連する文化財群を取りまとめる。

- ・島の成り立ちから見た歴史文化
- ・グスク群と第一尚志の祖、屋蔵大主の出自に関連した歴史文化
- ・神事や祭り、年中行事を継承する伝統的集落の歴史文化

2) 文化財群の考え方

(1) 島の成り立ちと環境基盤から見た歴史文化の特徴と文化財群

伊平屋島と野甫島は特異な地質・地形からなり、伊平屋島には2億5千万年遡る琉球弧の地質時代を知る資源がある。また伊平屋島は高島として海上で目立つ要所であり、石灰岩でできた低島の野甫島は水資源が不足するなど、環境基盤が歴史文化に大きな影響を与えてきた。

地質や地形、水系やサンゴ礁などの島を取り巻く環境が、長い歴史の中で島々の生活基盤を形成してきた結果、3千年ほど前に貝塚時代の人々が住み始め伊平屋島と野甫島の歴史文化が展開してきた。このような島の成り立ちと環境基盤に関連する文化財は歴史文化を読み解く上で重要な視点であり、関連文化財群として位置付ける。

(2) グスク群と第一尚志の祖、屋蔵大主の出自に関連した歴史文化財群

高島の伊平屋島にはヤヘーグスク、田名城、腰岳山頂のグスク、上里グスク遺跡、賀陽グスクが存在し、野甫島にもグスク時代の遺構が確認されている。九州・奄美と沖縄島の間に位置して海上に浮かぶ伊平屋島や野甫島は、海上交易の盛んなグスク時代に、重要な場所として位置していたことが推測される。とりわけ、伝承が多い我喜屋腰岳周辺の屋蔵大主関連遺跡は、第一尚志と三山統一などに展開していく琉球の歴史の中で、時代の転換の契機となった歴史文化財群として位置付ける。

(3) 神事や祭りなどの年中行事を継承する集落の有形無形歴史文化財群

稲作が農業の中心であった伊平屋島の田名、前泊、我喜屋、島尻の4集落では稲作に関連した祭りや年中行事が執り行われ我喜屋の綱引きなどは代表的な祭りである。また、野甫の集落は小さな島にありながら御嶽などの聖地も多く、他集落と同様に年中行事が盛んである。一方、独立する5つの集落は長い時間をかけて集落移動や合流をしながら現在に至っており、歴史の痕跡としての井戸や御嶽などを聖地として守り伝えてきた。集落の道筋やサンゴ石を積み上げた屋敷囲い、木造赤瓦の屋敷など伝統的な集落構造も色濃く残している。このように、集落に密接な有形無形の歴史文化資源は、伊平屋村を「民俗学の宝庫」と言わしめており、集落歴史文化財群として位置付ける。

2. 伊平屋村における歴史文化保存活用区域の考え方

1) 島の成り立ちに関連した歴史文化保存活用区域

島の成り立ちに関連する歴史文化保存活用区域は、以下の考えを基本として設定した。

(1) 2億5千万年を遡る島の成り立ちと地質時代

伊平屋島は極めて古い地質の標高 200mを超えるチャートと砂岩泥岩、野甫島は石灰岩を環境基盤としている。チャートの生成時期は約 2 億 5 千万年の時代に遡り、硬質で急峻な地形を呈し、比較的新しい砂岩泥岩はなだらかな地形で水を通し山裾からは湧水が出る。野甫島石灰岩の地質年代は数万年で、チャートと比較すると極めて新しい地質である。

(2) 海上の要所となった高島伊平屋島の目立つ地形

虎頭岩などに見られるようにチャートの地質は硬質のため際立つ地形を呈している。賀陽山や腰岳、後岳、タンナ岳などの急峻な山地は標高 200mを超え、海上から見える連山や立ち寄りやすい港など、伊平屋島と野甫島は地質や地形特徴から海上の要所として機能したと言える。

(3) 貝塚時代の始まり

地質時代の後期に氷期が終わるとサンゴ礁と砂丘の形成が進み、人々の生活環境が整い始め伊平屋島・野甫島において貝塚時代が始まる。とりわけ東海岸側で貝塚遺跡が多く分布しており、その後の歴史文化の基礎となっている。

(4) 伊平屋島の稲作文化

伊平屋島東側に見られる沖積地は山からの湧水を受ける粘土層で、我喜屋や田名は稲作が盛んである。一方、多孔質石灰岩からなる野甫島は透水性が高くて飲料水の確保が難しく、稲作には不適な場所である。

(5) 特異な地形が生み出す聖地や伝説

クマヤ洞穴は天照大神と関連する伝説があり聖地として拝まれ、無蔵水には夫婦愛、グスクが築かれた海上のヤヘ岩には戦いの伝説がある。

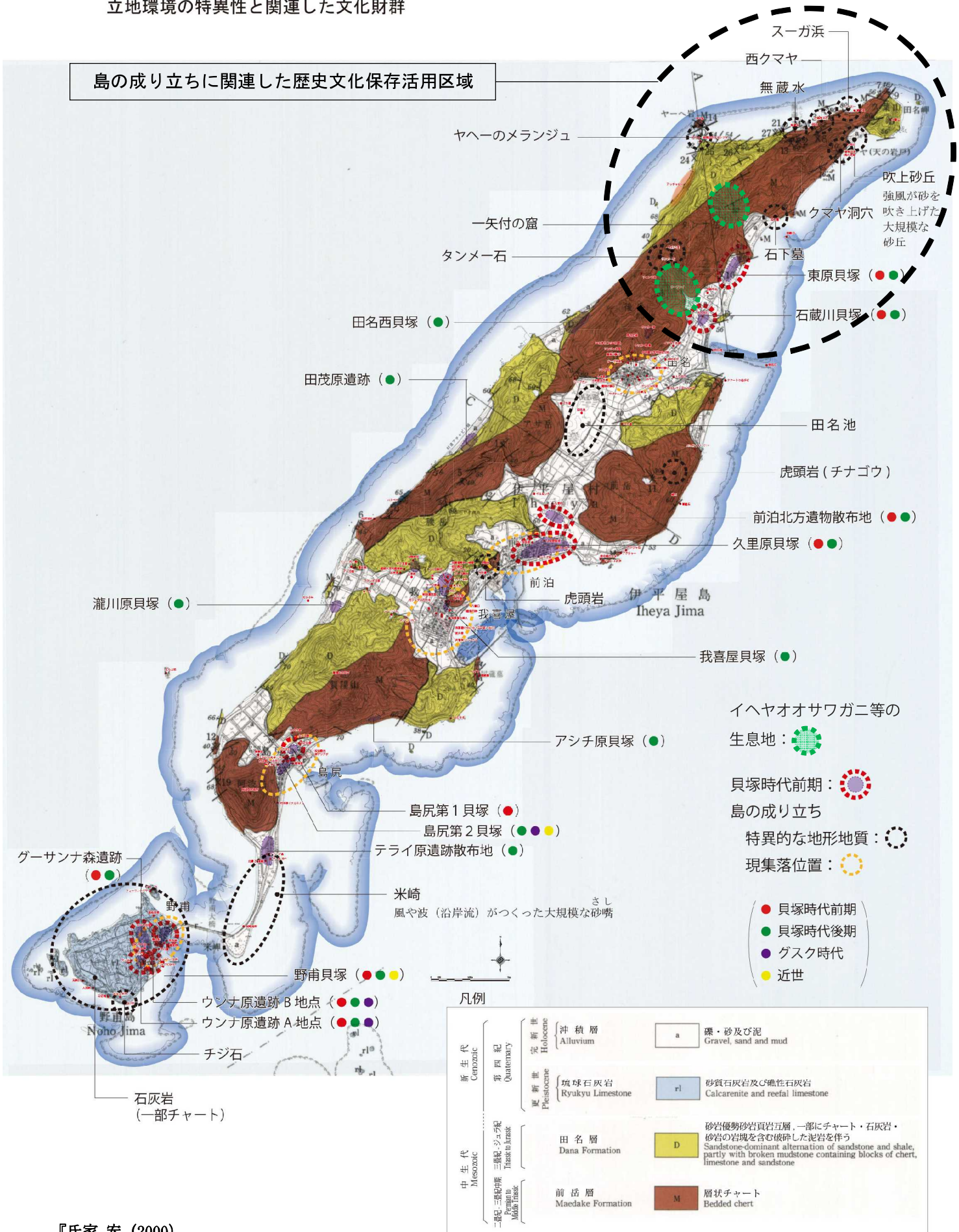
(6) 二又川に生息するイヘヤオオサワガニなどの固有種

二又川にはイヘヤオオサワガニやアラモトサワガニなどの甲殻類が生息し、天然記念物としての価値を持った生物と環境がある。(参照：伊平屋村自然環境業務委託報告書 平成 21 年 3 月)

(7) 田名北部「島の成り立ち」歴史文化保存活用区域

田名北部にはチャートや砂岩泥岩、学術的に価値の高いメランジュ、海と風の影響を強く受ける砂丘地形、特異な地質や地形に生まれた神話や伝説、さらにはクバ山やイヘヤオオサワガニなど、島の成り立ちに関連し天然記念物としての価値が高い文化財集中区を、島の成り立ち保存活用区域として位置付ける。

島の成り立ちに関連した歴史文化保存活用区域



『氏家 宏 (2000)

5 万分の 1 地質図幅「伊平屋島及び伊是名島」. 地質調査所』に一部加筆

2) グスク時代、屋蔵大主の出自に関連した歴史文化保存活用区域

第一尚志の祖、屋蔵大主の出自に関連する歴史文化保存活用区域は、以下の考えを基本として設定した。

(1) 伊平屋島と野甫島の要所にあるグスク時代遺跡

伊平屋島には田名城とヤヘーグスク、上里遺跡、野甫島のウンナ原遺跡、島尻の第2貝塚がグスク時代の周知の遺跡である。

(2) 悉皆調査で確認された賀陽山頂のグスク

歴史文化基本構想に先立つ文化財悉皆調査で周知の遺跡である賀陽山頂の井戸は、城郭石積みに囲まれ城門は島尻集落に向いているグスク内にあることが確認された。さらに城門は朝鮮半島に見られる甕門（オウジョウ）と呼ばれる様式を持ち、田名城とは異なる城郭様式を持っている。

(3) 御嶽と関連するグスクと腰岳頂上の石積み

悉皆調査において琉球国由来記に書かれた御嶽の場所を確認する段階で、田名城と賀陽グスクが御嶽と重なっていることが確認できた。我喜屋の「カタクマ嶽御イベ（神名コシアテ森）」は片隈御嶽の場所であると言われてきたが、腰岳山頂にもグスクがあり転じて御嶽になった可能性を想定した。その結果、腰岳山頂に「我喜屋の拝所」と書かれた場所があり、周辺には連続した石積み状の遺構が確認できた。伊平屋村史や我喜屋字誌などには石積みやグスクに関する記述はなく、聞き取り調査でも情報は得られていなかった。

(4) 海上を見渡し、海上から遠望されるグスク群

周知の田名城とヤヘーグスク、悉皆調査において新たに確認できた賀陽グスクと腰岳のグスク状遺構は、南北に細長い伊平屋島の代表的な山々の頂きに築かれ、周囲の海上を見渡し海上からも存在感を示す要所に、グスク群として分布している。

(5) 伝説の屋蔵大主に関する遺跡踏査

歴史文化基本構想段階では、伊平屋から出自したと言われてきた第一尚志の祖、屋蔵大主に関連する遺構確認踏査を重点化した。原名（ハル名）で屋敷跡と呼ばれる腰岳麓一帯や上里遺跡周辺の踏査を実施し、片隈御嶽の階段近くまで縄張りを意識した段状平場が伸びている状況を確認した。

この一帯は屋蔵大主の伝承と重なる場所であることから、屋蔵大主関連遺跡としての可能性が高まっている。

(6) 佐敷城跡の立地環境との類似性

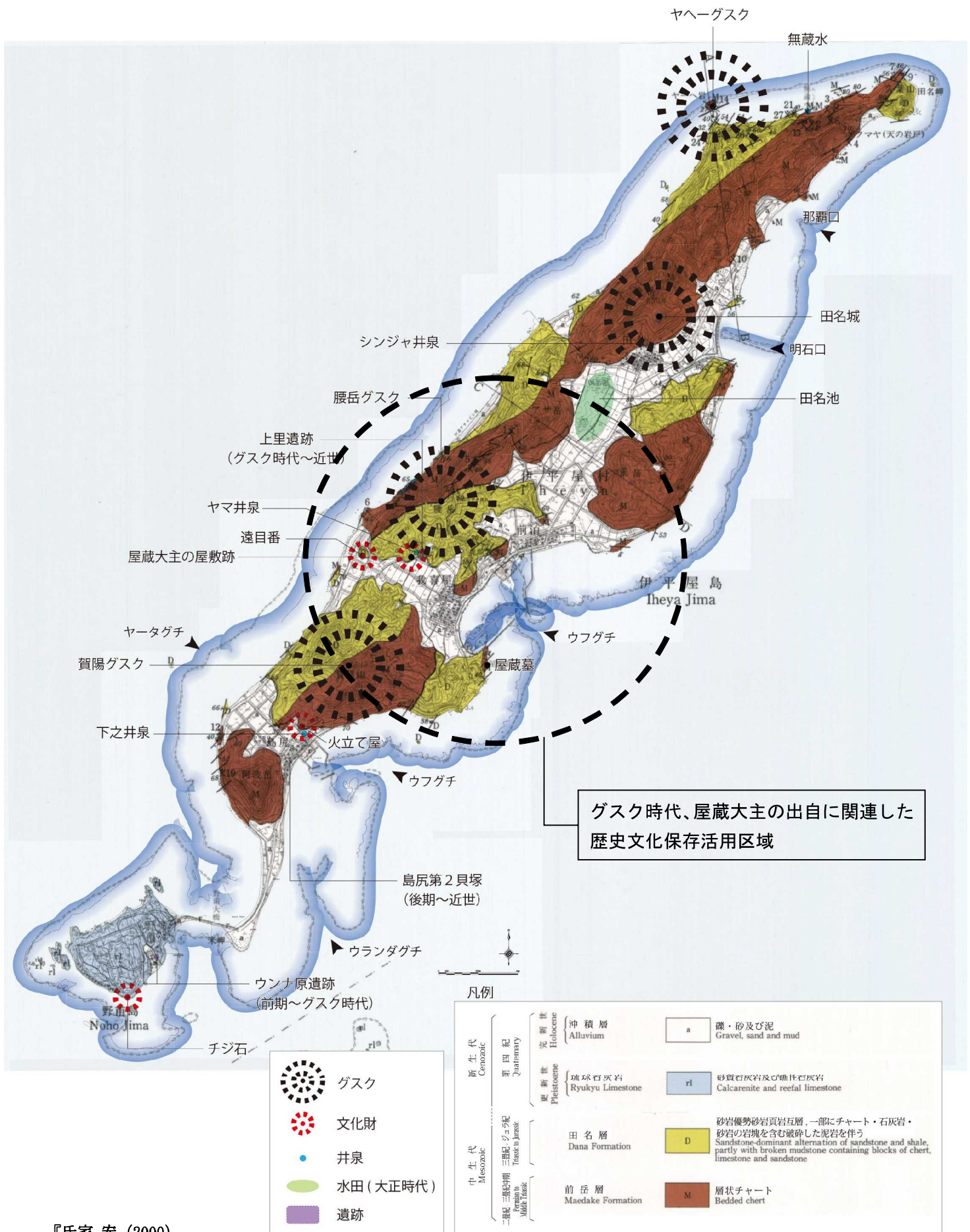
屋蔵大主の子孫である鮫川大主や尚巴志が南城市の佐敷上グスクを築いたが、その後、三山を統一して琉球王国が成立した。

佐敷上グスクと周辺の歴史的環境を俯瞰すると、馬天港を前方にみた斜面に関連する遺跡が分布しその中央に佐敷上グスクが築城されている。屋蔵大主関連遺跡を俯瞰すると腰岳山頂のグスクと麓の遺跡は伊平屋島の中央の前泊港を前面に展開している。このように2つのグスクに関連した歴史的環境に類似性を見いだすことができる。

(7) グスク時代、屋蔵大主の出自に関連した歴史文化保存活用区域

グスク時代の遺跡は伊平屋島と野甫島に分布しているが、中でも屋蔵大主に関連する遺跡群は伊平屋村の歴史文化基本構想の大きなテーマとなり、今後の地域づくりにも効果的に保存活用できると考えた。そこで、腰岳山頂のグスクと周辺遺跡を中核にして、港南西端に屋蔵大主の墓やハミタキ、北東端のマージャ御嶽に囲まれた範囲を屋蔵大主関連歴史文化保存活用区域とした。

グスク時代から琉球国に移行する時代の関連文化財群



『氏家 宏 (2000)

5 万分の 1 地質図幅「伊平屋島及び伊是名島」, 地質調査所』に一部加筆

3) 神事や祭り、年中行事を継承する伝統的集落の歴史文化

伝統的な集落構造や集落景観、年中行事などの有形無形の集落関連文化財と関連性ある範囲を集落歴史文化保存活用区域として設定した。

(1) 5つの伝統的な集落

伊平屋島の田名、前泊、我喜屋、島尻の4集落、野甫島の野甫の合計5つの集落は、それぞれの成り立ちや歴史文化に特徴がある独立した集落である。各集落は特定の山や里海と関連の深い集落構造を形成している。また、集落内には昔ながらの道筋やサンゴ石の屋敷囲い、木造赤瓦の家など伝統的な集落景観を保持している場所が多く見られる。

(2) 伊平屋最大の集落である田名

伊平屋島の半分を占めるほど広い田名は大田名と呼ばれ、東海岸の旧ガジナ村と田名グムイ南側の旧久里村が現在の田名村に合流したと言われている。集落の外周には東と西、南を向くムラを守るシーサーが置かれ、集落を守っている。田名集落は田名城を背後に南斜面に展開して前方には田名グムイと水田が広がり、大田名節にも詠われる美しい集落構造を呈している。

田名には稲作文化が息づき伝統的な年中行事が盛んである。また、台風避難で一時寄宿した喜界島ノロの旅立ちを見送ったことが起源とされるウンジャミは、現在でも旧暦7月17日に執り行われている。

(3) 久里原貝塚の場所に広がる前泊

前泊は沖縄本島や伊是名出身者が多い新しい集落と言われているが、伊平屋島の原始社会が始まった久里原貝塚は、現在の前泊集落と重なる場所に位置しており、古い歴史を持つ場所でもある。一方、現在の伊平屋村は前泊港フェリーターミナルを中心に役場や学校、歴史民俗資料館、ホテルなどが立地しており、前泊は伊平屋中心部の新しい集落とも言うことができる。

(4) 屋蔵大主と関連が深く伝統的集落景観が残る我喜屋

屋蔵大主は我喜屋から出自したとの伝説があり、海岸の屋蔵墓は所縁の地とされてきた。我喜屋は集落を移動しながら現在地に拡大してきたが、内村は井戸や墓地、神道などの文化財とともに伝統的な集落景観を色濃く保持している。集落西側には水田が広がり、一期作目の稲の刈入れが終わる旧暦6月25日に収穫への感謝と来年の豊年を祈願し綱引きが行われる。

(5) 里海と一体となった島尻

伊平屋島の南端の島尻はサンゴ礁に数多くの海名がつけられ、伝統漁法を今に伝える集落である。集落の北側は最高峰の賀陽山がそびえ南に阿波岳、伝統行事が行われるトゥヌチやアジアゲが中心に位置する集落はサンゴ石の屋敷囲いがよく残り、伝統的集落景観を保持している。

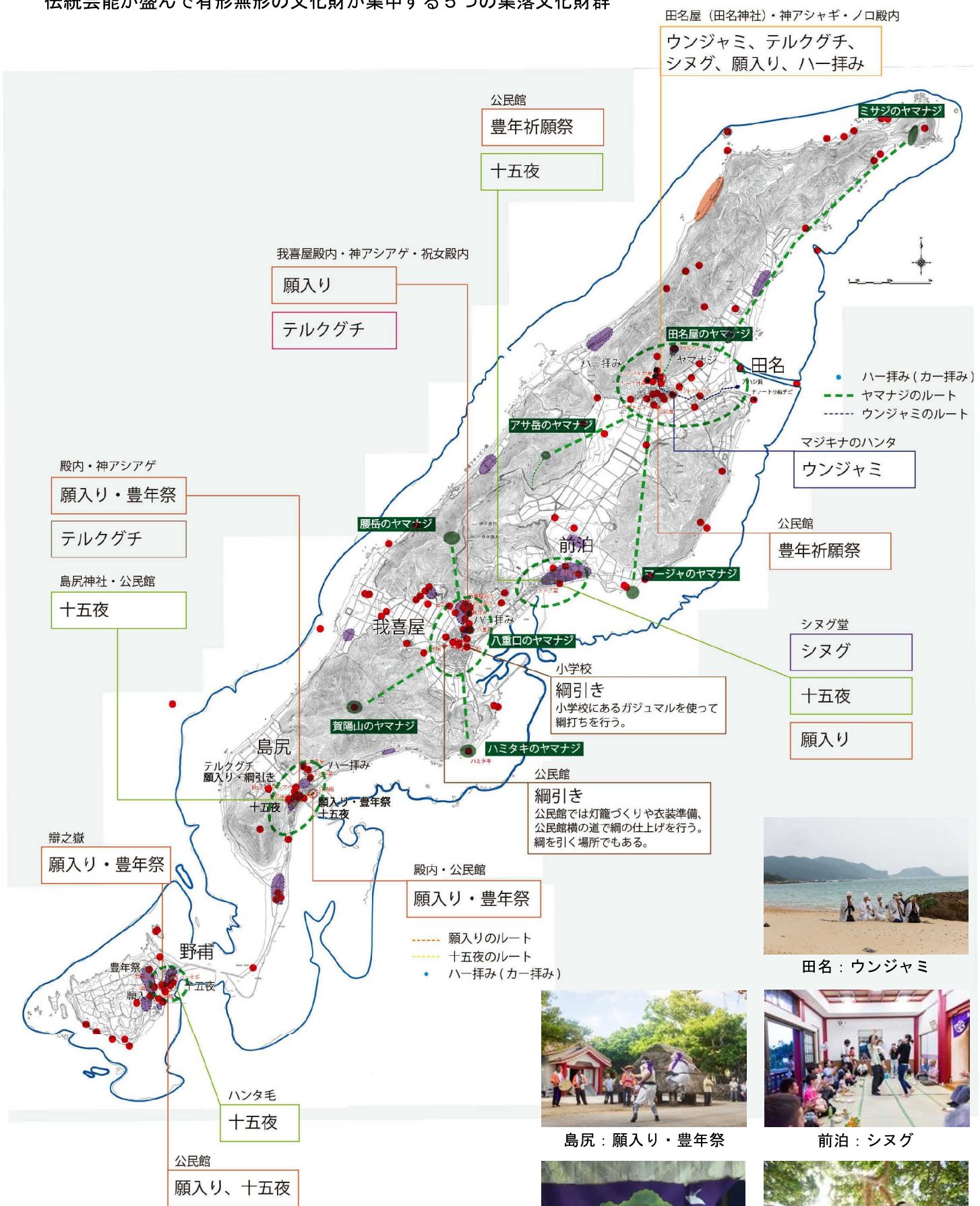
(6) 原風景を保持する野甫

石灰岩の小さな島の野甫集落は野甫島北東部の東南の海に面する斜面地に立地し、貝塚時代から人々が住み着いてきた。島の北側には段状に区画された畑が続き、島外周には手付かずの海岸線が連続している。小さな島ながら聖地も多く、戦争中に身を隠したガマなどの戦跡もある。

(7) 集落を代表する田名と島尻、野甫

5つの集落のうち、伊平屋最大の集落である田名、里海と一体となった島尻、原風景を保持する野甫の3つの集落を対象として、集落と関連する歴史文化資源や範囲について保存活用区域として設定する。なお、我喜屋と前泊は、屋蔵大主の出自に関連した歴史文化保存活用区域に含まれる。

伝統芸能が盛んで有形無形の文化財が集中する5つの集落文化財群



田名：ウンジャミ



島尻：願入り・豊年祭



前泊：シヌグ



野甫：願入り・豊年祭



我喜屋：網引き

3. 歴史文化保存活用区域とテーマ

1) 関連文化財群と歴史文化保存活用区域

歴史文化関連文化財群は、「島の成り立ちから見た歴史文化」、「グスク群と第一尚志の祖、屋蔵大主の出自に関連した歴史文化」、「神事や祭り、年中行事を継承する伝統的集落の歴史文化」の3つの視点から関連文化財群と保存活用区域の検討を行った。視点と大まかな時代の関係は、「島の成り立ち」は地質時代、「屋蔵大主関連」は貝塚時代からグスク時代、「伝統的集落」は歴史文化を踏まえた現在に相当する。これらの視点に関連した文化財群の状況から、歴史文化保存活用区域を以下の5区域とした。

2) 歴史文化保存活用区域とテーマ

(1) 島の成り立ちと神話

伊平屋村の歴史文化は「島の成り立ちから見た歴史文化」の理解が不可欠である。田名北部は地質時代の資源と神話伝説に関連する文化財が集中する区域として、「島の成り立ちと神話」をテーマとした。

(2) 琉球国の兆し

「グスク群と第一尚志の祖、屋蔵大主の出自に関連した歴史文化」を代表する文化財群は、腰岳を頂点にした山地から前泊港にかけた低地一帯に集中する。当区域はグスク時代の終焉と王国の誕生に関わる琉球史上極めて重要な場所であり、「琉球国の兆し」をテーマとした。

(3) 大田名節に詠われる美しいシマ

ウンジャミなどの神事や豊年祭など年中行事を継承してきた田名は、田名城や田名池、念頭平松などの景勝地も多い。有形無形の歴史文化財群を保持する集落と、杣山（ソマヤマ）の歴史を持つ山々や海などを含めた歴史的環境を区域とし、「大田名節に詠われる美しいシマ」をテーマとした。

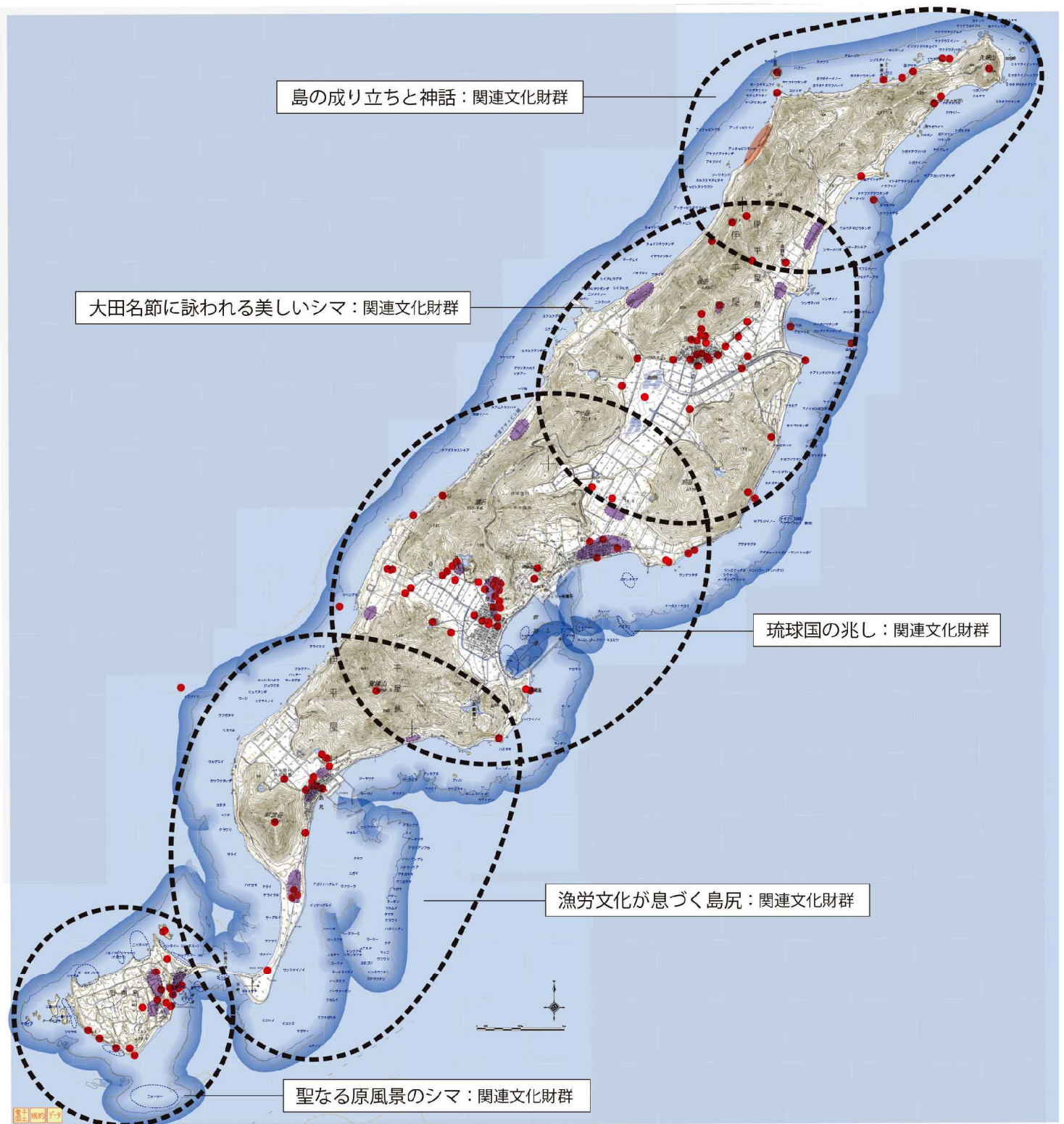
(4) 漁労文化が息づく島尻

島尻は伊平屋村の中で最も珊瑚礁の奥行きが深く、多くの海名と伝統的漁法も残る海人のシマである。これらの漁労文化が息づく珊瑚礁の海域とアシアゲやトゥヌチを中心に形成された伝統的集落、さらに賀陽山と阿波岳を含む区域とし、「漁労文化が息づく島尻」をテーマとした。

(5) 聖なる原風景のシマ

野甫島は石灰岩からなる小さな島で、島の東南部に位置する集落は島尻と橋でつながる。厳しい水事情や稲作が成り立たない土地事情があるが、比較的改変が少なく農地や集落、手つかずの自然海岸など、原風景のシマである。集落は御嶽や神々に守られており、珊瑚礁に囲まれた島を区域として「聖なる原風景のシマ」をテーマとした。

伊平屋島・野甫島の歴史文化保存活用区域とテーマ



第4章 歴史文化保存活用区域の方向性

1. 島の成り立ちと神話

1) 歴史文化資源の概要

(1) 急峻な山地

田名北部はクバ山（94m）、タンナ岳（236m）、後岳（230.8m）が連山となり地形の骨格を形成している。これらの山地は30～40度の急峻な地形を呈し、場所によっては岩盤が崩壊し露岩がむき出しになった状況も多く見られる。

(2) ヤヘ岩周辺に見られる最も古い地層（メランジュ）

ヤヘ岩周辺にのみ見られる伊平屋層は地層厚約90m、砂岩、頁岩、チャートの互層からなり、フズリナ化石を含む石灰岩がレンズ状に挟まれている。フズリナ化石の種類から古生代二畳紀の下部に相当し、本県最古の地層の可能性があるとされている。

(3) 2億5千万年前の地質

クバ山やタンナ岳、後岳をはじめ伊平屋島の山地に広範囲に分布する前岳層は、古生代二畳紀にあたり、およそ今から2億5千万年前に遡る地質である。岩質はチャートを主体として砂岩、礫岩などを挟み、チャートは白、緑、赤、灰色などの色変化を示した層をなしている。クマヤ洞穴の入り口付近では、一般にチャート岩相の特徴である微褶曲構造を見ることができ、潮下浜やクバ山、無蔵水の周辺では赤や白のチャートが点在する。

(4) 県指定天然記念物のクマヤ洞穴やクバ山

クマヤ洞穴はチャートを主体とした岩質からなる洞穴で、西海岸の西クマヤにつながっているとも言われている。一方、全山がクバ単独の植物群落で被われたクバ山は伊平屋島の最北端に位置し、これら二つは県天然記念物に指定されている。

(5) 風に吹き上げられた砂

冬の厳しい北側からの季節風を受け、田名北部の海岸部では海拔100mの高さ位まで砂が吹き上げられている。かつてクマヤ洞穴の北側斜面に見られた砂が作った斜面は道路や海岸整備などの影響もあり変化してきたが、西海岸側には斜面に吹き上げられた砂地形を顕著に見ることができる。

(6) 砂岩泥岩のホーチナ

ホーチナ周辺は砂岩泥岩からなる浸食しやすい地質からなり、山間低地は水田として利用された。現在は緩やかな地形に牧草地が広がり、周辺の急峻な山地や森とは異なる風景である。二又川ではイヘヤオオサワガニやアラモトサワガニが生息し半夏生（ハングショウ）などの湿地植物が見られる。

(7) 神話や伝説等が残る場所

地形や地質の特徴が著しいクマヤ洞穴には天の岩戸伝説、村指定名勝の無蔵水では大田名節にも詠われた夫婦愛、ヤヘ岩にはグスクが築かれ戦の伝説など神話や伝説が多く残る場所である。また田名の石下墓は東海岸のチャート岩を利用した共同墓地である。

2) 関連する周辺施設等

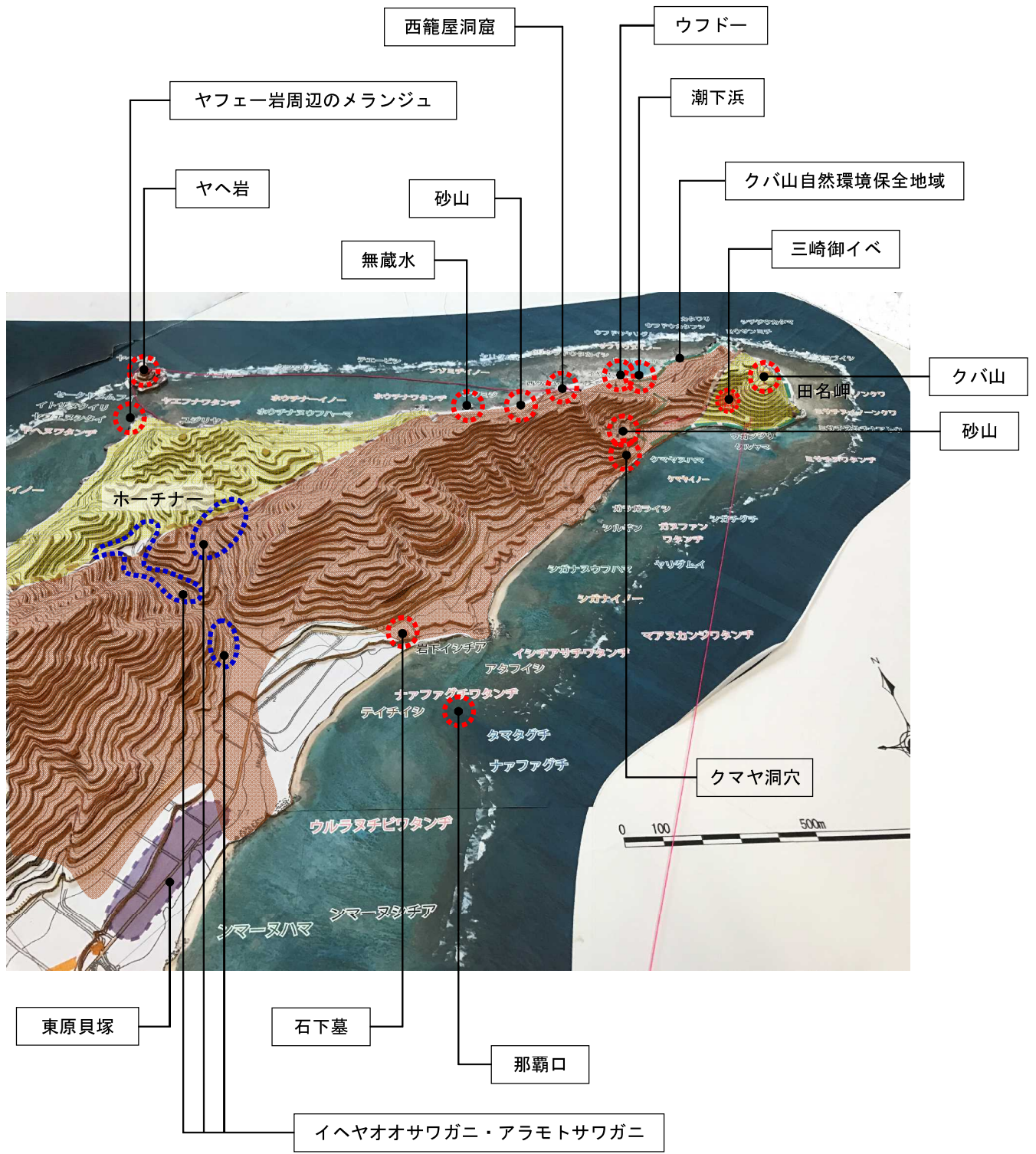
①クマヤーキャンプ場

②潮下浜進入路

③灯台

⑤沖縄県自然環境保全地域

歴史文化資源の概要



注：山地の色区分は 53 ページの地質図参照

3) 保存活用の方針

(1) 貴重な天然記念物資源の指定

田名の西海岸に存在するメラングジュは地質学から見ると極めて貴重な資源である。メラングジュの分布調査を実施し、天然記念物としての指定と保護、活用を図る。

(2) ヤヘーグスクを伊平屋島グスク群の一つとして上位指定

伊平屋島に確認された5箇所のグスクは、伊平屋島グスク群として国や県の上位史跡指定を検討する。伊平屋島最北の海上グスクの特徴を持つヤヘーグスクも、その一つとして位置付ける。

(3) 絶滅危惧植物等の調査

貴重な植物資源として県指定のクバ山と国指定念頭平松がある。また、絶滅危惧植物として北部海岸や岩場のオキナワハイネズ群落、牧場内湿地のハンゲショウ、二又川に生息するイヘヤオオサワガニなど、貴重な植物や動物の保護・保全に向けた調査が必要である。

(4) 島の成り立ちと神話の解説広場

およそ2億5千万～3億5千万年の歴史を持つチャートの地層やクマヤ洞穴、クバ山周囲の緑や赤のチャート、グスクや墓に利用されているチャート、さらに伝説と関わるクマヤ洞穴や無蔵水、石下墓など伊平屋島の成り立ちと特徴に関する情報や野外での観察案内の場の整備を検討する。

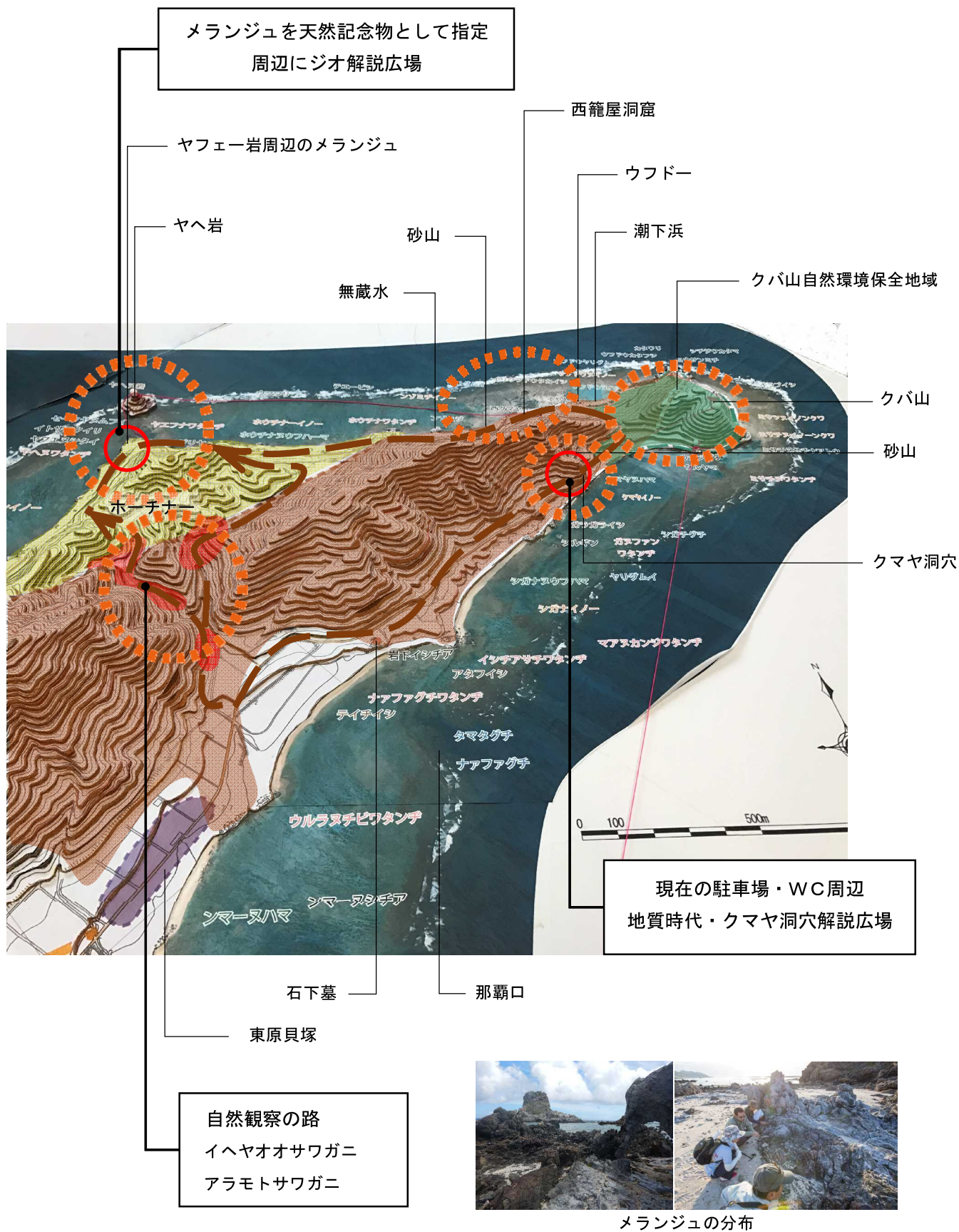
(5) 砂岩泥岩部の牧場ルート利活用

伊平屋島にはチャートと同時に西側大陸に起因する砂岩泥岩が存在し、概ね1億5千万年の歴史がある。牧場内の道路は利用が制限されているが、東海岸側と西海岸側を結び、地質・地形の違いや土地利用、景観などの違いがわかるルートとして価値がある。島の成り立ちを理解する上で重要な位置を占め、ジオコースとして活用を検討する。

(6) ガイドブックやジオガイド

「島の成り立ちと神話」保存活用区域は、島の歴史文化に触れる上で基本となる情報を保持している。島々の成り立ちや特徴と関連しながら、集落立地や土地利用などの基礎情報について伊平屋島・野甫島のガイドブックを作成し、学校教育で活用できるよう企画を検討する。これは、広く村民や来訪者が伊平屋村を理解する上でも活用できるものである。また、ジオと文化、ジオと神話などを解説できる島人ガイドは、島の魅力を伝える上で重要な役割を果たし、専門家の協力を得たガイド養成を検討する。

島の成り立ちと神話 保存活用区域の方向



注：山地の色区分は 53 ページの地質図参照

2. 琉球国の兆し

1) 歴史文化資源の概要

(1) 原始社会の始まり、久里原貝塚

島々の周りにサンゴ礁が発達してくると砂の供給が増え、島の沿岸部に砂州や砂丘が形成されて内陸環境も整ってくる。伊平屋島と野甫島に見られる多くの貝塚遺跡は海岸部の砂の高まりのある場所に点在している。貝塚遺跡を代表する久里原貝塚から、九州や奄美、沖縄本島との交易を示す多くの遺物が発掘されている。

(2) 稲作の適地とグスク時代への移行

伊平屋島はチャートや砂岩泥岩からなる山々が西側に連なり、東側に沖積低地が広がっている。久里原貝塚の北西や我喜屋上里遺跡周辺の地質は侵食を受けやすい砂岩泥岩からなり、山裾からの湧水を受け沖積低地には水田が立地する環境である。腰岳を中心とした我喜屋上里や前泊久里原周辺は稲作の適地となり、貝塚時代からグスク時代への移行を可能とした立地環境と言える。

(3) 可能性の高まった屋蔵大主の出自

伊平屋は第一尚氏の祖である屋蔵大主が出自した地と言われてきた。我喜屋東海岸にある墓が屋蔵大主の墓と言われるようになってから、第一尚氏に縁のある人達から拝まれる場所になっている。一方、上里遺跡の近くには蔵屋敷や屋敷跡などの原名（ハル名）があり、その土地が屋蔵大主と関連があるという土地の名前に刻まれた記憶が地元には残っている。

平成 27 年度調査で確認された我喜屋の腰岳山頂や周辺の石積み状遺構（グスク）、腰岳麓の上里遺跡、我喜屋や前泊に広がる水田地帯は、屋蔵大主と密接な関係のある歴史的環境である。これらのことから、伝説の屋蔵大主が実在した可能性が高くなったと言える。

(4) グスク立地に欠かせない前泊港

現在も伊平屋島の中心にある前泊港は、屋蔵大主がグスクと一体となってシマづくりの拠点とした場所と考えられる。伊平屋島の海上からの進入は、今も昔も前泊港が優れている。前泊港は北側端部にマージャ御嶽、南側端部にハミタキ御嶽と屋蔵大主の墓があり、湾の南寄りにウフグチがある。船が入港する時は、まず虎頭岩が見え背後にグスク頂部を仰ぎ見る光景である。また、グスク頂部からは前泊港、伊是名島、遙か遠くに国頭や今帰仁、与論島などを遠望できる。グスク頂部は西海岸にも眺望が開け、海上の様子を把握できる要所である。

(5) 上里遺跡近くに残る海に関連した原名（ハル名）

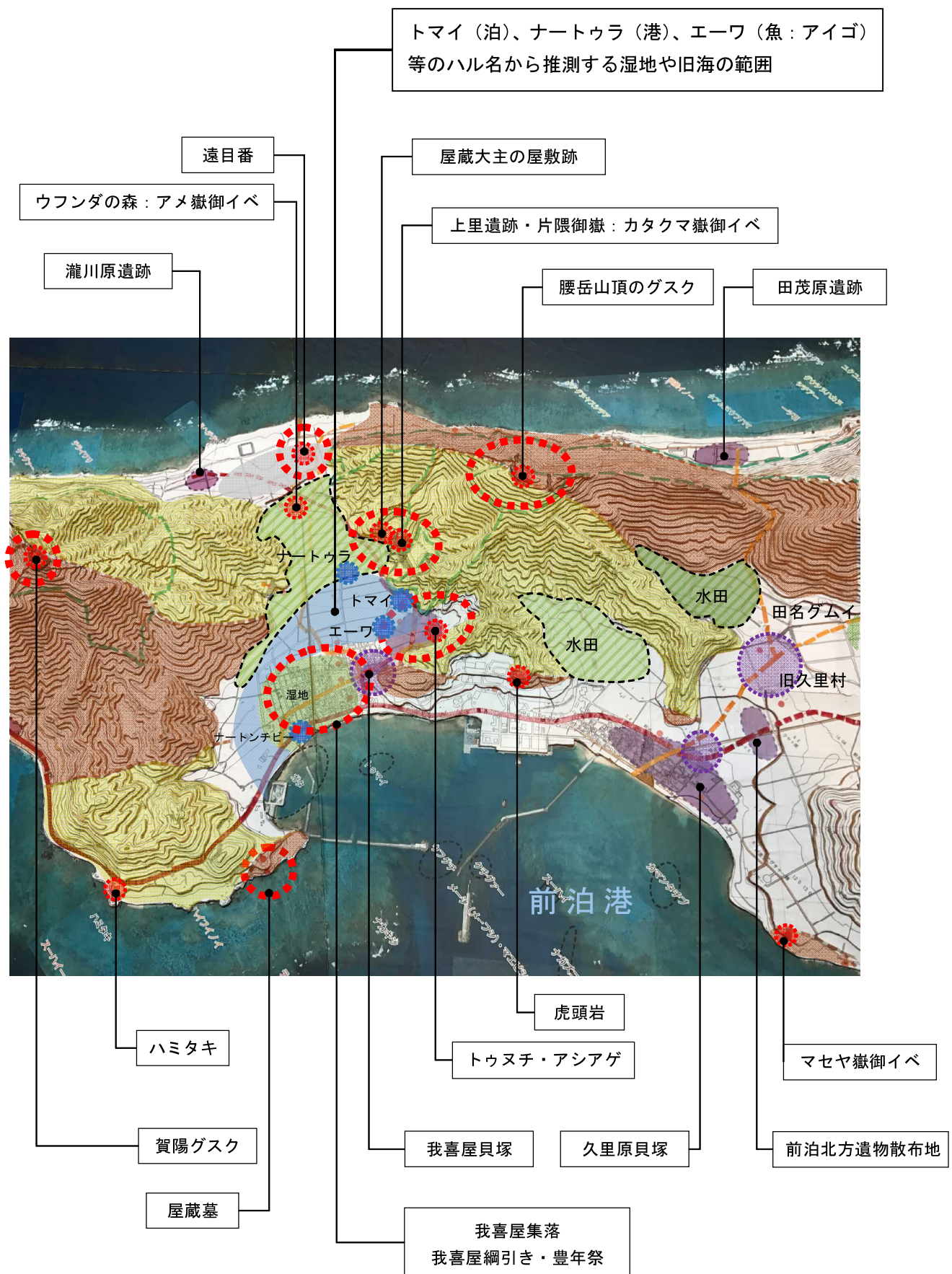
我喜屋の字誌では土地の名前、ハル名を文化財と位置付け、地名や由来、意味などが記録されている。その中から地形や海に住む生物、港などに関連するハル名を拾い出すと、上里遺跡やトゥヌチなどの近くまで海面が入っていた様子が伺える。現在の前泊港に流入する川の河口より内陸部に湾があり船が進入し、港として使われていた時代のあることが推測できる。

(6) 佐敷グスク築城様式との関連

屋蔵大主の子孫は佐敷に移動し佐敷上グスクを築城したが、石を貼ったグスク築城様式をとっている点に特徴がある。上里遺跡や腰岳山頂のグスクに見られる石積み状遺構には、石材を斜面に貼ったような状況も散見される。

また、佐敷上グスクは馬天港に面しながら稲作適地の低地部を持っていた。腰岳のグスクと前泊港、我喜屋前泊の稲作地帯などを擁する屋蔵大主のシマづくりと類似する点は多い。

歴史文化資源の概要

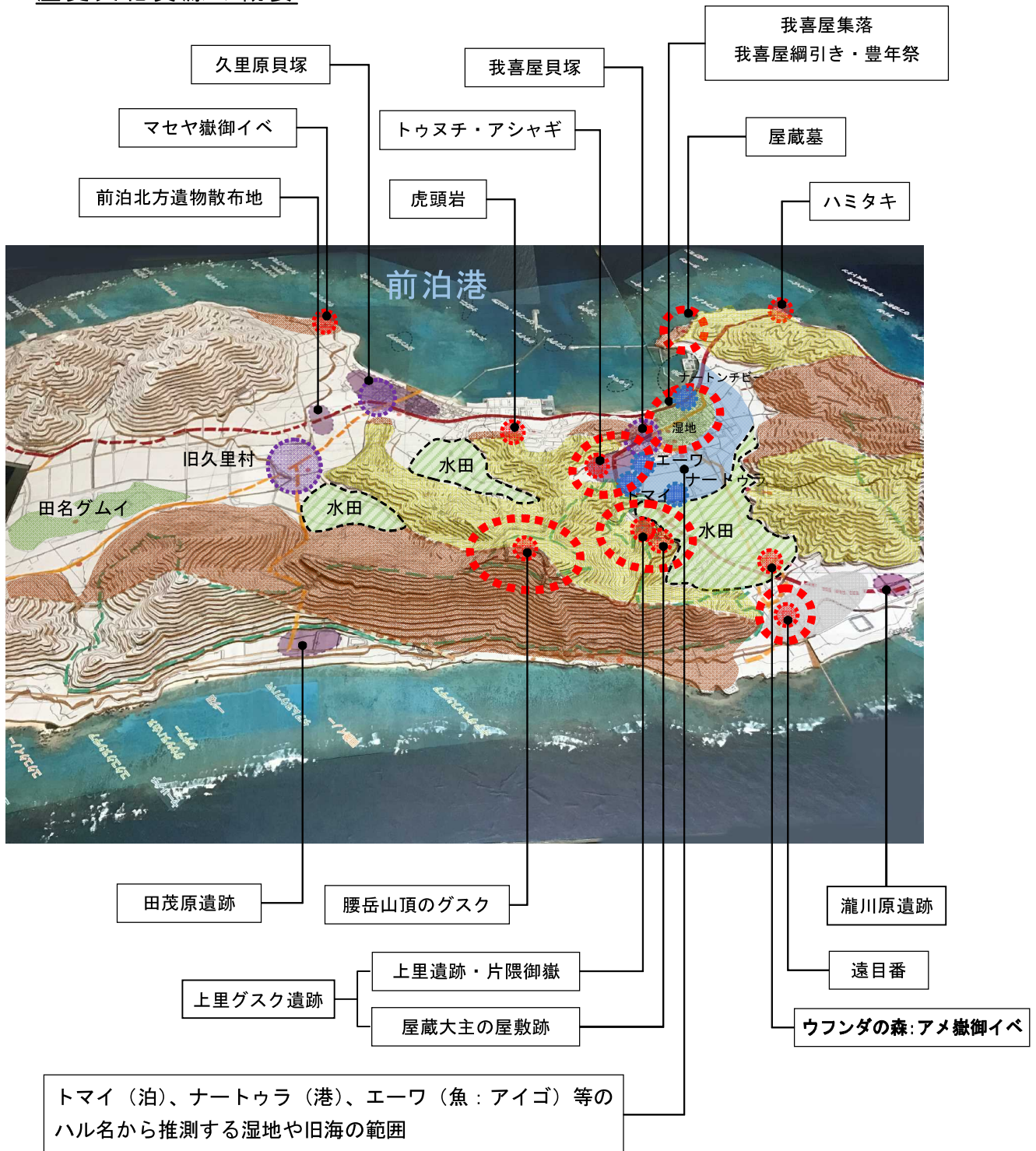


注：山地の色区分は 53 ページの地質図参照

(7) 移動集落の我喜屋と綱引き

我喜屋集落は西海岸に近いウフンダから東に向けて移動した集落と言われており、その過程に関連した遺跡も点在する。トゥヌチやアシアグがある一帯から内村にかけては井戸や共同墓、神の道、サンゴ石や赤瓦の伝統的集落景観など、多くの歴史文化資源がある。また、稲作の一期作目の刈入れが終わる旧暦6月25日に、区民で集めた稲藁を使い収穫への感謝と来年の豊年祈願を願う綱引きが行われる。

歴史文化資源の概要



注：山地の色区分は53ページの地質図参照